

# アジアの遺跡保存と日本人

上智大学アジア文化研究所長 石澤良昭

— 文化遺産の復興に援助の手を  
アジアのどこの国にでかけても、日本製品があふれています。このところの円高で誇張された経済大国日本のイメージがあることは確かですが、開発途上国からは政府開発援助(ODA)の伸び率に熱いまなざしが注がれています。

私たち「アジアの文化遺産再発見研究会」(事務局 上智大学アジア文化研究所)がとりあげている文化遺産の保存修復問題は、国際協力事業団や国際交流基金では扱われません。文部省の監督下のユネスコ・アジア文化センターも遺跡の保存のキャンペーンを行うのみです。

これまで、遺跡保存修復の国際協力は、ユネスコの強力な支援をうけて行わされてきました。



東京で開催された第1回「アジアの文化遺産の再発見」シンポジウム(昭和60年4月15日、上智大)。出席者・ユネスコ事務次長K、ヌカギアンサー博士

すでに、エジプトのヌビア遺跡、インドネシアのボロブドール遺跡が竣工を完了しています。このほかに現在、アジアはタイのスコータイ、ビルマのパガン、ベトナムのフエ、バングラデ

イスラムのパハルプールとバグラートなど九遺跡が採択され、ユネスコから資金と技術協力の援助をうけ、保存修復が行われています。

しかし、昨今のユネスコの財政事情には厳しいものがあり、各國では細々と自前で保存修復活動を行っているのが現状です。国際キヤンペーンによる資金集めと技術協力に期待をかけていますが、なかなか思うように進展していません。私はユネスコの専門委員(パリ本部)として、バングラデイシュの仏跡パハルプールの保存修復問題の助言を行っていますが、日本でどのようにこの問題をはたらきかけ、組み立ていくか、模索しているところです。日本は、確かに経済協力の分野で大きな役割を果たしていますが、この経済大国にふさわしい対外文化協力を行っているかどうかを考えてみると、前述のように、文化遺産の保存修復に関する援助問題を扱う省庁が、明確に位置付けられていない

眼には文化国日本のイメージがやきつくことでありますよう

## 2 相手国の理解に不可欠



インドネシア・ボロブドール遺跡事務所会議室で開かれた第2回「アジアの文化遺産の再発見」シンポジウム出席者。ボロブドール遺跡前で（昭和61年10月31日～11月3日）

ことからも明らかです。文化庁は、対外文化援助を扱つております。もし、日本がアジアの遺跡・文化財等の保存事業、物質的・技術的援助を行ふのであれば、アジアの人々の

私は、アジアにおける日本の重要な文化的役割として、アジアのこうした文化遺産の保存修復に手をさしのべていくべきであると、提言します。ちなみに、ボロブドール仏跡の保存修復については、救済アピールから一四年の歳月を経て、一九八三年二月に修復工事をおえました。が、その費用は総額二〇〇〇万ドルにのぼり、日本からは一二三〇万ドルの拠金が送られました。そして、日本は拓殖大学の千原大五郎教授をこの遺跡の国際技術諮詢委員会に送り込み、その修復事業に参画し、石材保存・築石技術を学ぶとともに、インドネシアの歴史と文化を識ることができました。

ところで、一九六七年にユネスコがボロブドール仏跡の救済アピールをだしたとき、このボ

ロブドールを知っていた日本人は何人いたでしょうか。あまり多くはなかつたと思いますが、現在では、日本からの観光ルートにはかなならずボロブドールがはいつており、多くの日本人が



ボロブドール遺跡の保存修復問題の現地検証  
研究をする専門家たち

この仏跡に感嘆して帰ってきています。

インドネシアの人々への理解は、その民族と伝統文化への尊敬の念なしには成り立ちません。そのてつとり早い方法は、その民族の文化遺産に触ることからはじまります。

アジアの固有な伝統文化の復興と遺跡保存に手助けする日本、文化と平和を愛する日本、アジアから好かれる日本、経済協力にあわせて文化協力を前面に掲げる日本、そうした日本の姿勢を子供たちに受け継いでいきたいのです。

その意味で、アジアの諸遺跡保存に対する各国の熱い期待を伝え、日本の文化的な役割をもう一度考えてみたいと思います。

### 3 「人」の国際協力から

アジアへでかける学生たちにいつもいうことは、次のことです。つまり、アジアの国々を経済発展の面からだけみるとではなく、そこに住む人々が現実の社会のなかでどのような暮ら

しをしているか、その生活がそれなりのシステムのなかでどのように位置付けられているのか、それらを日本の社会と比較しながら実現してほしい、という内容です。



アンコール・ワットの東側塔門から（屋根が解体されたままの第1回廊東面南側部分・12世紀前半・カンボジア）＜昭和55年8月撮影＞

ごくあたりまえのことですが、東南アジアにはインド・中国とは違つた“東南アジアらしさ”があります。細かくいうと、タイにはビルマと異なるタイ独特の雰囲気があります。そうした



アンコール・ワット第1回廊内庭。荒れ放題で草木がのびている（12世紀前半・カンボジア）＜昭和55年8月撮影＞

タイらしさを形成しているものは何であるのか、学生たちに見聞した範囲で語つてもらうようになります。

では、東南アジアという地域を造りだしている、東南アジア的な共通の枠組を構成している要素とは、いったい何なのでしょうか。それは、タイとビルマとを比較すると、多くの相違点が浮彫りにされます。つまり、その地域もしくは国家を形成している“らしさ”には共通性と相違性が裏づけされているのです。

こうした地域研究もしくは民族固有の文化形成の研究を歴史的に検証するには、その典型的な例証の一つとして、この地域において創出された文化遺産の研究が、多くの示唆を与えてくれると思います。

東南アジアには、インドネシアの仏跡ボロブドール、ビルマの仏塔寺院趾パガン、タイの宗教都市趾スコータイ、カンボジアの壮大な伽藍

アンコール・ワットなどが、世界最大級の文化遺産としてしられています。これら4大遺跡は八～十三世紀頃に造営されていますが、それは日本の奈良時代から鎌倉時代にかけての時期に相当します。

これらの遺跡には各民族の偉大な過去が刻まれ、当時の人々の最高の価値観を凝集・具現した、歴史的モニュメントでもあり、栄華の痕跡をとどめた民族芸術の総体でもあります。これらの遺跡研究は、一般論として、往時の歴史・文化・社会等の問題を解明する一つの手がかりともなっています。それと同時に、建築美術・宇宙観・水文諸技術を内包した実物資料としても有効です。特に、東南アジアでは歴史文献が欠落しているため、その意味からも重要な生きた資料となっています。

私たちの研究方法論とその組織の特徴は、次の四点にあります。第一に、これら遺跡が東南

力のパイロット・スタディとして、ユネスコをはじめ遺跡の当該国の研究者を含めての国際共同研究プロジェクトにつながっているということです。



カンボジア情報文化省遺跡局長ウック・チア  
氏と討論する石澤氏（昭和63年3月18日）

アジアという共通の地域で建設された意義をふまえての相互比較研究です。第二に、民族文化の独自固有性の形成過程の研究です。そして、

第三には、各専門分野の研究者に参画してもらったの学術的な研究です。第四に、地域文化協

4 五〇年から一〇〇年の展望をもつ文化事業  
4年前に日本・インドネシア・タイ・ビルマの四カ国に、それぞれ遺跡研究会が組織されました。この国際共同研究プロジェクトには、四カ国とユネスコから三八名の研究者・専門家が加わり、四大遺跡に共通する保存・修復の技術上の諸問題および、歴史・文化等の研究に取り組み、地域形成研究につながる文化の比較研究を行っています。そして、年一回、各国の研究グループがもちまわりでシンポジウムを開催し、第4回のシンポジウムは一九八八年7月にビルマのパガンで開催されます。

私たち共同研究者一同は、二一世紀に向かつて、これらの文化財の保存・修復・研究を遂行

していくという共同責任を再確認するようにしています。そして、五〇年、一〇〇年の長期保存修復計画の展望にたって、アジア版の地域文化協力を一步ずつ実現していくべき、手をつないだところです。

遺跡を守る協力は、まず研究者同士の信頼関係に基づく「人」の国際協力からはじめなければなりません。この点において、日本の果たすべき文化的役割がいかに大きなものであるか、あらためて再認識しているところです。

## 5 修復事業の計りしれぬ波及効果

仏跡ボロブドールは、五年前に修復工事をおえました。その後イスラム過激派が爆弾を仕掛け、九基の仏塔を破壊しました。さらに、最上階の大仏塔に落雷があり、被害をうけていますが、その修復も完了しています。

ところで、一九八七年一〇月に第一回シン・ポジウムを同遺跡の会議室で開催したおり、現場

検証をかねて「破壊された仏塔がどれであるかを探しだしてほしい」という課題がインドネシア側研究会から出されました。出席した一二名の日本・タイ・ビルマ・ユネスコの専門家は、なかなかみつけだすことができませんでした。それほど完璧に修復がなされ、その技術水準の高さに感嘆しました。

遺跡の保存修復事業というのは、壊れたもの、損傷した文化財をただ単になおすだけではなく、材質・建築様式・建立時代・宇宙観などの調査研究に立脚したものでなければなりません。その意味において、幅広い波及効果が生じる文化発展事業ともいえます。

第一に、ボロブドールの爆発仏塔の復元工事が示されたように、約一〇年間にわたる修復解体工事は、インドネシアの学術研究全般に強い刺激を与え、研究体制の制度確立と技術面、研究面での人材の養成をもたらし、学術発展に寄

与する契機を作りました。第二に、遺跡修復の現代史的な意義があります。文化遺産に対する一般大衆の関心を高めるという、民族心理学的・文化的効果をもたらしています。つまり、

遺跡の学術的な解明の結果が、そこに住む人々に還元され、文化的独自性を再認識すると同時に、大きな民族的自負と誇りを付与するのです。

第三に、遺跡の国際キャンペーンをとおして、その国の歴史・伝統文化を世界に紹介するとい

う宣伝効果があげられます。文化遺産は外国人がその国の民族や文化の固有性を理解するもつともよい教材であり、そのキャンペーンが多くの観光客を招致するきっかけともなっています。第四に、遺跡の保存修復の事業を遂行したという自信は、国づくりのあらゆる分野に心理的な波及効果をもたらします。こうした修復事業の成功事例は、近隣のアジア諸国に対しても、やればできるという一種の自信を与えていくこ

とになります。

## 6 危機のアンコール・ワット

カンボジアにある世界最大級の文化遺産アンコール遺跡群が、倒壊の危機に直面しています。

私は一九八八年三月に二週間にわたり、遺跡破壊状況調査を実施しました。六回目の調査はカンボジア南部地方にあるアンコール時代の遺跡を対象に調査しましたが、破壊が予想以上に進行していました。

カンボジアでは不幸にも一九七〇年代からあいつぐ内戦のために、遺跡の保守作業が中断され、多くの専門家が殺され、また国外に逃れました。そのため、三名しかいないこの遺跡専門家が中心となつて活動を再開しています。ただし、最大の石造伽藍アンコール・ワットには一九八七年からインド考古総局のメンバー14名がはいり、保守工事を援助しています。

アンコール王朝は九世紀から約五〇〇年にわ



スコータイ遺跡の仏像、現在も信仰の対象となっている。(13世紀末、ワット・マハタート寺院内、タイ国)

現在で三五一名の陣容をもつて保守作業の使命を遂行していますが、人材の欠落、修復資材の不足、予算の制限などの悪条件が重なり、思うようにまかせないといわれています。

今回の私の遺跡調査は、こうしたカンボジアの窮状をみかねての手伝いであるとともに、今後の修復計画の立案のための資料収集が目的でした。同じアジアの仲間として、私たち日本人が「熱帯の密林のなかに埋没するアンコール遺跡を救おう」という運動に加勢していく必要があると思います。

たり、カンボジア全土に都城と寺院を造営しました。その数は一二〇〇カ所にもおよんでいます。その保護作業が一度中止されると、熱帯植物の緑の暴力が遺跡におおいからびさり、雨もり・浸水による土台と列柱の脆弱化、バクテリアの侵食など、自然の猛威による破壊が進んでしまいます。

カンボジア文部省の遺跡局では、一九八八年